2024年11月3日　説教「目が見えるようになり」

ルカの福音書18章35～43節

今朝もルカの福音書18章から学んでいきましょう。ルカはパウロの伝道旅行によく随伴していた弟子で、医者でした。

１．イエスの到来を知った盲人（35～37節）

①ある盲人が道ばたに（35）**「イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。」**

イエス・キリストはエリコを訪れた後には、エルサレムに向かうことになりますが、ここはエリコに入る直前です。エリコ古くからの町で、ヨシュア記にも出てきます。今、イエスがエリコの町に入ろうとしています。その途上の道路端にその人がいたのです。彼は盲人でした。道ばたに座って物乞いをしていました。マルコの福音書では、バルテマイという名前が出てきています。マタイの福音書では二人の盲人とありますが、物ごいがしやすい場所だったのかもしれません。

②盲人の質問（36）**「群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。」**

イエス・キリストがエリコに向かう時にも、人々はその後を追っていきます。盲人にとっては、そのざわつきがどうしてなのかわかりません。ともかく、いつもとは違う熱気のようなものがありました。人々から漏れてくる言葉から、彼は何もしないで済ませて良いとは思われませんでした。そこで、彼は通行人に、「これはいったい何事ですか」と尋ねたのです。

③盲人の質問への答え（37）**「ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、」**

すると、人々から答えがありました。「あのナザレのイエスがお通りになるのだよ」ということでした。それを聞いて、なんだナザレ村出身のイエスが来られるのか、だとしても自分にとって何の意味もないと思っても不思議ではありませんでした。

２．主の憐みを求めた盲人（38～40節）

①私をあわれんで下さい（38）**「彼は大声で、『ダビデの子イエスさま。私をあわれんでください。』と言った。」**

しかし、その盲人は大声で叫びました。『ダビデの子イエスさま！』。『ナザレのイエスさま！』ではなく、ダビデの子イエスと呼んだのは、その方がダビデの流れから生まれ、旧約聖書で約束されているメシヤ（救い主）であると確信したからこそでした。それは、『私を憐れんで下さい！』と言っているところにも表れています。前回学んだ、パリサイ人と取税人のたとえ話に出て来た取税人も、『罪人の私を憐れんで下さい』と述べています。そこには、神なる方の前に謙遜になり、憐みを請う人の姿がありました。キリエ・エレーソン（主よ、あわれみたまえ）は先週学んだばかりです。

②たしなめにもかかわらず（39）**「彼を黙らせようとして、先頭にいた人々がたしなめたが、盲人は、ますます『ダビデの子よ。私をあわれんで**

ください』と叫び立てた。」

盲人が大声で叫んだので、先に行く人々が、彼を黙らせようとしたのです。その様子は、この章のなかにある人々と似ています。誰の事でしょう。それは、子供たちとその親たちがイエスの所に殺到したときに、彼らを注意したイエスの弟子たちです。しかしここで、盲人は黙ろうとはしませんでした。それどころか、さらに大きな声で、「あわれんでください」と願いました。

③イエスの対応（40）**「イエスは立ち止まって、彼をそばに連れて来るように言いつけられた。」**

すると盲人の叫ぶ声を聞いたイエスは立ち止まりました。そして、その人を、イエスのところに連れてくるようにと言いつけられたのです。もちろん、叫ぶ全ての人に、イエスがこのように言われたかどうかはわかりません。少なくとも、この盲人の叫びのなかに真実を認めてくださったのです。

３．見えるようになった盲人（41～43節）

①何をしてほしいのか（41）**「彼が近寄って来たので、『わたしに何をしてほしいのか』と尋ねられると、彼は、『主よ。目が見えるようになることです』と言った。」**

イエス・キリストは盲人のほうに近寄ってくださいました。そして、『わたしに何をしてほしいのか』と尋ねられました。すると、盲人はためらいなく率直に、『主よ』と呼びかけたうえで、『目が見えるようになることです』と述べました。遠慮して、「生活が良くなることです」とか「助け手が必要なのです」とかではなく、彼の持っている根本的な望みを伝えたのです。

②見えるようになれ（42）**「イエスが彼に、『見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです』と言われると、」**

イエスはその盲人に『見えるようになれ』と権威をもって言われました。その理由は、『あなたの信仰があなたを直したのです。』でした。つまり、この盲人のうちにある、イエスを救い主とし、キリストにはいやす力があると信じる心を認めて下さったのです。盲人の側では、ただただすがる思いで、イエスの前に出たのですが、それを評価してくださったのです。

③神をあがめて（43）**「彼はたちどころに見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て民はみな神を賛美した。」**

イエスのお言葉で盲人はすぐに見えるようになりました。闇の世界に 光が射したのです。見えずに絶望したこともあったでしょう。相当の苦労もしたでしょう。物乞いをして生活するしかありませんでした。その日までは、ずっとそのままのつもりだったかもしれません。しかし、今や見えるようになったのです。彼は、目を見えるようにしてくださった神をほめたたえ、イエスについていきました。また、この様を見た人々は神を賛美しました。ハレルヤという声が響いてきます。

《結論》

今朝の聖書箇所から、三つのことを学びましょう。

第一に、イエスが「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねられたのに対し、「主よ。目が見えるようになることです」と答えた点です。すでに各節の学びでもお伝えしたように、それは真に率直な受け答えでした。もうすでに召された牧師が「遠慮は罪だ」と述べました。その牧師の真意はこうでしょう。心のなかで、秘かに「こうしてもらいたい」と思っていても、いろいろな人の思いを忖度し、遠慮して言うべきことを伝えないことがあります。それは人間関係においては評価されることもあるかもしれません。この国の民の間では、遠慮は美徳である場合があるのは確かです。事実、他の牧師は「遠慮をすることは大切だ」と言われたことがありました。しかし、主なる神に対しては遠慮する必要すはありません。神のみ思いを忖度する必要があるでしょうか。いや、率直に願いでることが必要なのです。「求めなさい。そうすれば与えられます」は率直に求めることを示しています。

第二に、この盲人の「見えるようになることです」という申し出に対して、主イエスが、この男の信仰をみて、見えるようにしてくださったという点についてです。そこに、主なる神の恵みの愛がいやしというかたちで現わされたのです。昨日、姉ヶ崎キリスト教会で行われたチャペルコンサートでご奉仕くださった北田康広師は全盲です。おそらく、見えるようにしてくださいと願われたのは一度や二度ではなかったことでしょう。しかし、主はそれに対して答えてくださっていません。主は北田氏を愛しておられないのでしょうか。いいえ、週報の裏ページにも記したように、神は北田氏の盲目をギフト（賜り物）として与え、喜ばしく生きるために用いてくださっているのです。北田氏は見えないのではなく、見えるようにされたのです。神の愛はそのようにして現わされたのです。

第三に、この盲人は見えるようになった時、神をあがめながら主について行ったということ、またこうした出来事を見た人々が神を賛美したという点です。神をほめたたえることは麗しいことです。ウェストミンスター信条の小教理問答の第一問にこうあります。『人の主な目的は何ですか』、その答えは『人の主な目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神をほめたたえることです』。この盲人が、目が見えるようになった時になしたことは、神をほめたたえることでした。また、そこにいた人々がそうせざるを得なかったのも、神をほめたたえることでした。人間にとって、心の底から霊的に喜ばされるときに、出てくることは神を賛美することです。そこにこそ、平安や慰めがあるのです。北田先生は、全盲の人として、神の栄光をあらわし、神をほめたたえ、喜びをもって生きていることを、その存在をもって証ししてくださいました。

讃美歌130に「喜べや たたえよや シオンの娘 主の民よ」とありますが、私たちも主をほめたたえながら生きることができれば良いですね。マイナスと思える出来事のなかにも主はいてくださると信じて、神を賛美していきたいものです。そういう意味でも、礼拝に参加することは有益です。礼拝は賛美を基調としているからです。主をほめたたえつつ生きていきましょう。